



ホタルがすめる川を 次世代に残そう！

ホタルが飛び交う季節になりました。皆さんの近所の川でも、ホタルの乱舞は見られるでしょうか？

ホタルは皆さんもご存知のとおり、きれいな川に生息します。これは水質もちろんですが、川縁の自然環境も大切になります。ホタルは川岸のコケなどの上に0.5mmほどの小さな卵を産み付けます。そこからかえった幼虫は、川底でカワナなどの巻貝を餌にして成長し、そして4月の上旬には水の中から出てきて、川岸の土の中でサナギになり約50日かけて成虫になります。

つまり、川岸がすべてコンクリートで固められていたり、川底にヘドロが溜まっていたり、また川にごみが捨てられ水質が悪化しているようなところでは、ホタルはすめなくなってしまうのです。

市内の河川では、さまざまな団体や自治会で、ホタルをはじめとした川辺の生

き物がすめる川づくり活動が行われています。例えば、川底のヘドロの除去やごみ拾い、川岸の草刈りも除草剤を使わないようにするなどのほか、ホタルの幼虫の放流なども行われています。

こうした市民の手による川づくりを広げていくために、環境基本計画のプロジェクト活動が中心となって、さまざまな主体が連携し、よりよい地域の川づくりを行っていくことを目的とした「水フォーラム」が下記のとおり開催されます。また市では、自治会が実施する河川愛護活動について、補助金の交付を行っています。

地域の川を地域からきれいに、ごみの少ない、ホタルがすめる川を次世代に残していくために、私たちができることを実践しましょう。



◆環境課

☎ 587-6003
📠 587-3834

ホタルを観察しよう！

里山・森・里地・里川・ びわ湖の「水」フォーラム

市内の山からびわ湖にいたる水環境保全の取り組み活動報告会を開催します。水環境に興味がある人は、ぜひご参加ください。

日時…6月26日(土)午後1時30分～3時30分

会場…コミセンなかさと大ホール

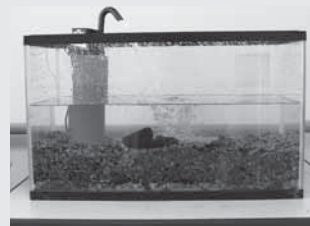
内容…水源の山、森、川、田畑、びわ湖の水環境保全に取り組む市民団体や自治会の活動事例の報告

主催…環境基本計画推進会議里川づくり委員会

参加費…無料※申し込み不要

市役所分庁舎にあった「ホタル資料室」がコミセンひょうずのロビーに移転しました。

ホタルの幼虫や生態に関する資料を見ることができますので、ぜひお越しください。



粗大ごみ等の減量をめざし、物品のリユース（再利用）の推進を図るため、リユース物品の展示および無償譲渡会を開催します。ごみとして処分するのではなく、まだまだ使えるリユース物品を展示しますので、皆さんのご来場をお待ちしています。

譲渡の申し込み…①午前10時～11時の間に希望するリユース品に対し申し込みます（一人第3希望まで）。②午前11時に譲り渡す人を決定します。（複数申し込みがある物品については抽選）

注意：引渡し後のリユース物品は返品できません。リユース物品の瑕疵責任は負いません。リユース物品の第三者への譲渡は禁止します。

第5回リユース物品の無償譲渡会開催

開催日時…6月13日(日)午前10時～11時
開催場所…(仮称)野洲市リユースセンター

(西河原2419/旧消防署車庫)

毎月第4土曜は 廃食油回収の日

6月26日(土) 午前10時～午後1時

回収会場：市役所別館（旧コミセンやす）
横電話ボックス付近

回収物：廃食油、牛乳パック、アルミ缶
☎環境課 587-6003、エコロジーマーケットやすの会・増村 586-1441

歴史の小窓

—学芸員のメッセージ—

(69)

歴史民俗博物館

☎587-4410、Fax587-4413

【6月の休館日】月曜・火曜日

◆テーマ展「近江八景と名所図」／6月5日(土)～7月11日(日)

◆第64回銅鐸研究会「近江の弥生遺跡と銅鐸」／6月12日(土)午後2時～4時

講師…伊庭功さん(滋賀県文化財保護協会)

※当日受付、野洲市民は聴講無料

◆第2回ふおれすとフォトギャラリー(弥生の森写真展)／6月12日(土)～8月29日(日)

※作品募集中

◆まちかど博物館「井口を歩く」／6月19日(土)午後1時30分～

※コミセンひょうず集合

近江八景図屏風

よしむらこうけい
吉村孝敬筆

「近江八景」は、石山秋月、瀬田夕照、粟津晴嵐、矢橋帰帆、三井晚鐘、唐崎夜雨、堅田落雁、比良暮雪からなり、中国の「瀟湘八景」になぞらえ、琵琶湖周辺の風景や名所を選んだものです。安土桃山時代から江戸時代初期頃に、公家の近衛信尹が詠んだ和歌が、八景として定着したと考えられています。江戸時代には絵画や工芸品に描かれ、広く親しまれてきました。

写真の作品は、吉村孝敬(1769～1836)筆、1799(寛政11)年の近江

八景図です。六曲一雙の屏風で、紙本淡彩、水墨を基本に彩色をほどこし、八景を四景ずつ右隻、左隻に配しています。画面構成は、手前を詳細に表現し、遠方をやや淡めに描くことで、琵琶湖を巡るように配した景色に奥行きのある遠近感をあらわしています。また、八景ではない比叡山や三上山、石場の常夜灯も写實的に描き、行きかう舟や人々の動きを生き生きと表現して、風景画に味わい深さを与えています。

この作品は、近江八景図の

なかでも、实景に即した写生画としては最初期のものと考えられ、たいへん注目されます。瀬田唐橋は、橋の中ほどの中ノ島の様子が克明に描写され、対岸の橋本町の町並み、手前の家並みの様子もあらわしています。膳所城は、石垣や天守閣、城内の木立ちを描きます。後方には帆船が浮かび、矢橋の湊にも船が並んでつけられています。その背後には、三上山を大きく描きます。頂上がやや右に下がった姿は、大津の湖岸あたりから見たままであり、实景そのものを描写しています。このように、真景図として描かれた姿は、絵画作品としての趣のみでなく、江戸時代、18世紀末ごろの景観を考えるうえで、歴史的にも興味深い資料となりうるものです。

三上山は、近江八景には数えられていませんが、その背景に登場することも多く、ここでも大きく描かれています。吉村孝敬は、円山応挙の晩年の弟子で、長澤蘆雪らとともに「応門十哲」の一人にあげられる絵師です。伝統的な狩野派の画法や応挙の写生

画を学び、京都画壇で活躍しました。また、父の吉村蘭洲は野洲の出身であり、郷里への想いから、「近江富士」とよばれる三上山をこのように表現したのかもしれない。今回のテーマ展では、歌

川広重の浮世絵「近江八景」なども展示していますので、見比べながら、江戸時代の風景画の世界を楽しんでみてください。

(博物館学芸員 行俊勉)



近江八景図屏風(右隻・部分) 吉村孝敬筆・1799(寛政11)年 当館蔵